

わが国におけるイスラム研究(一)

— 中国篇 —

羽 田 明

わが国における中国イスラムの研究は、1911~12年(明44~大元)、遠藤佐佐喜、桑原隲蔵の両氏、とくに桑原博士によつて、その口火が切られた。つとに東西交通史に多大の関心をもたれた博士は、イスラム教の中国伝来の問題に関連して、唐代のものといわれる西安の創建清真寺碑の内容を検討し、曆法上の問題を中心に、これが明代の偽作にほかならないことを⁽²⁾明快に論証されたが、名著「蒲寿庚の事蹟」(1923、再版1935)においては、泉州在住のアラブ人(?)蒲寿⁽³⁾庚の閱歴を明かにされただけでなく、唐宋時代の中国におけるイスラム教徒の狀態や東西交通史上の多くの難問を解決されたし、「隋唐時代に支那に來住した西域人に就て」(内藤博士還曆祝賀支那学論叢、1926)のうちでも、イスラム教徒の東來についていくつかのすぐれた見解を提示された。唐宋時代の中国イスラムの研究は、桑原博士によつて、ほとんどその基礎が築かれたといつてもよい。

この間、元明以後の中国でイスラム教徒を指す回回という名称の起源を考察して回紇説を補⁽⁴⁾正された桑田六郎博士は、やがて明末清初に輩出したイスラム教徒出身の学者たち、いわゆる「回儒」の略伝とかれらの著作の概略を紹介し、西欧学者の誤を正されたが、ついで自から中国に遊び、各地の清真寺を訪れ、この旅行中の見聞に文献上の知見を加えて發表された。そのうちには、中国イスラム史についてのいくつかの注目すべき見解 — たとえば、先きに桑原博士が取上げられた閩書所載の武徳中(618~26)にイスラム教が伝来したという伝説の再批判や、清真寺という名称についての解釈など — がみえている。

イスラム、回教事情、回教園などの諸雑誌があい前後して創刊された1937~38年ころを境として、わが国における中国イスラムの研究は新しい段階にはいつた。というのは、文献学的な研究が一段と活発になつたばかりでなく、その不備を補う社会学的な現状調査もようやくさかんに行われるようになったからである。また文献学的な研究では、明清の中国イスラムの研究が首位を占めるようになったのも一つの特徴といつてよい。

文献学の分野でもつとも精力的な研究活動を行い、もつとも多くの業績を挙げたのは、その前途を囑望されながら、なお若くして昨年物故した田坂興道学士であつた。氏の研究は大体次

の三つのグループに分類できる。第一はイスラム教の中国伝来の伝説を取扱ったもの、第二は中国イスラムにおけるペルシア的要素の優越を論証したもの、第三は中国イスラムの社会史的考察である。

まず第一のものについていえば、イスラム教の中国伝来を隋の大業三年(607)の事件とし、唐の太宗の貞観二年(629)にはじめて清真寺が建てられたと伝えている大同の敕建清真寺碑記が、結局は西安の創建清真寺碑文の模倣にすぎないことを論証した論文、中国最初の伝教者として有名なワッカース Waqqās の伝説は元末明初に成立し、明清時代に発達したものであるが、その起源は恐らくペルシアにあるであろうことを推定した論文、曾て桑原博士がその起源を考えて北宋か唐末まで溯りうるとされた閩書のイスラム教伝来伝説を再検討し、桑田博士の批判を受継いで、それが到底明代以前には溯らないものであることを論じた論文などがある。

第二のグループに属するものには、元史天文志や元秘書監志にみえる西域伝来の天文観測器や書物の名称がペルシア語であることを確かめ、いわゆる回回曆法の性格を考察して、それがペルシア系のものにほかならないことを明かにした論文、華夷訳語中の回回館訳語の語句を解釈し、ペルシアに限らず、広くイスラム系諸国と中国との交渉には、ペルシア語が国際語として使用されたことを論証した論文、中国イスラムの用語中にみられるペルシア的要素、中国イスラムの文獻にみられるペルシア的要素、中国のイスラム教学におけるペルシア的なイスラム神秘主義の影響などを考えた論文等がある。

第三のグループに属するものとしては、中国のイスラム教徒はもともと外来の移住者であり、明代以後ようやく漢人化したのが、結局中国社会における異質的共同体として現在にいたつたことを述べ、民族としてはともかくも、政治、社会的には別に取扱う必要があると論じた序説的な論文をはじめ、明代における外来イスラム教徒の改姓問題を手がかりとして、その漢人化の過程を考察した論文、明代後期のイスラム教徒流賊の活動地域、状況を検討するとともに、なぜこのころから継続的にこのような反乱が起るようになったかの原因を考えて、中国におけるイスラム教徒の社会的地位の低下と、これに伴うイスラム教の中国社会、特に下層階級への浸透を指摘した論文などを挙げるができる。

田坂氏の労作以外では、従来中国のイスラム教徒の間には存在しないといわれていた族譜の発見を報じ、中国イスラムの社会史的研究に一石を投じた中田吉信学士の論文、清朝史上に活躍したイスラム教徒、とくに文武官として活動したイスラム教徒の経歴を述べ、イスラムの信仰と中国社会との間に存在した矛盾を考察し、武功によつて要職に就いたにもかかわらず、結局は不幸な最後を遂げた二人の人物を、このような悲劇の主人公として描写した同じ著者の論

(17)

文、清朝実録から清代におけるイスラム教徒反乱関係の資料を抄出し、この資料の分析を通じて、イスラム教徒の分布地域、職業、かれらの反社会的行為、回漢の対立互闘などを巨視的に考察した佐口学士の論文、清代イスラム史に重要な意義をもつ、いわゆる新教の成立、展開を取扱った同じ著者の論文などがもつとも注意される。

調査報告では、1940年にその報告が公刊された滿鉄北支経済調査所による華北のイスラム教徒の調査、1941~42年に、仁井田陞博士が北京の工商ギルド調査の一環として行つたイスラム教徒商工人仲間についての調査などもあるが、1943~44年に、岩村忍教授を指導者として行われた蒙疆イスラム教徒の調査は、もつとも注目すべきものといつてよい。中国イスラム社会の研究に対する従来の文献学的、歴史学的方法の偏重を批判し、現状から溯つて文献の空白を埋めなければならないとする教授は、蒙疆回民の分布と系統、清真寺と宗務者、教胞、郷老、教派等の諸項目に分けて調査の結果を発表し、中国イスラム社会の構造を解明された。同教授はさらに甘肅のイスラム教徒の間に、地域によつて二つの類型がみられることを指摘されたが、辺境地帯として甘肅と相似た条件にある蒙疆地区においても、やはりイスラム教徒の間に、華北型と内蒙古型とでもいうべき二つの類型があり、その相違がかれらの社会生活の各方面にわたつて現われているという説は、傾聴に値する。この調査に参加した佐口学士には、イスラム共同体の組織、イスラム教徒に共通の宗教的行為と生活習慣、イスラム教徒の習俗等を取扱った報告、中国イスラムのペルシア語、アラビア語の経典約四十五種を調査し、ペルシア系イスラム要素の東漸の時期、中国イスラム文化の系統、その構成要素等に論及した報告などがある。

以上のほか、イスラム建築については、伊東忠太博士や村田治郎博士、特に村田博士の論考があるし、イスラム天文学や曆法に関しては、田坂学士や藪内清博士の論考などもあつて、美術や科学についても研究が進められている。ただ、中国イスラムの研究は、全体としてみれば、なお未開拓の感を免れない。それには、資料の不足をはじめ、多くの原因が考えられるであろうが、根本的にはわが国におけるイスラム史研究そのものの未発達のせいとみて誤るまい。ことに、アラビア語、ペルシア語、トルコ語などの知識の貧困は、中国イスラムの研究にも致命的な障害になつていられると思われる。啓蒙的ないし紹介的な論文は別として、いわゆる回儒の著書の分析的研究さえこれまで徹底して行われなかつたのも、結局西アジアのイスラム資料との対照が困難だつたからにちがいない。西アジア史の本格的な研究が要請される理由はここにもみ出される。

— 註 —

- (1) 遠藤佐佐喜. 支那の回回教に就いて(東洋学報. 1の1, 1911)
- (2) 桑原隲蔵. 創建清真寺碑(芸文. 3の7, 1912)
- (3) 前嶋信次. 泉州の波斯人と蒲寿庚(史学. 25の3, 1947)
- (4) 桑田六郎. 回回に就きて(史学雑誌. 30の12, 1919)
- (5) . 明末清初の回儒(白鳥博士還暦記念東洋史論叢. 1925)
- (6) . 清真寺巡り(東洋学報. 16の1, 1924)
- (7) 田辺興道. 大同清真寺の「敕建清真寺碑記」について(回教圈. 6の2, 1942)
- (8) . 中国回教史上におけるワッカース伝教伝説(和田博士還暦記念東洋史論叢. 1951)
- (9) . 閩書に見える唐武徳年間回教伝來說話について(東方学報. 14の3, 1943)
- (10) . 東漸せるイスラム文化の一側面(史学雑誌. 53の4~5, 1942)
- (11) . 「回回館訳語」語釈(東洋学報. 30の1204, 1943)
- . 「回回館訳語」補正(東洋学報. 33の4, 1951)
- . 「回回館訳語」に関する覚書(回教圈. 6の5, 1942)
- (12) . 中国イスラムにおけるペルシア的要素(中央大学文学部紀要. 5, 1955, 6, 1956)
- (13) . 支那回教徒問題の史的考察(日本諸学研究報告. 17, 1942)
- (14) . 明代における外来系イスラム教徒の改姓について(史学雑誌. 65の4, 1956)
- (15) . 明代後期の回教徒流賊(東洋学報. 37の1, 1954)
- (16) 中田義信. 中国ムスリムと宗族組織(東洋学報. 38の1, 1955)
- (17) . 清代回教徒の一側面(東洋学報. 36の1, 1953)
- (18) 佐口 透. 中国ムスリム社会の一側面(内陸アジアの研究. 1955)
- (19) . 中国イスラムの神秘主義(東方学. 9, 1954)
- (20) 満鉄北支経済調査所. 北支の回教事情(1940)
- (21) 仁井田陞. 北京の回教徒商工人と其の仲間的結合(回教圈. 8の6, 1943)
- (22) 岩村 忍. 中国イスラム社会研究上の諸問題(民族学研究. 12の3, 1948)
- (23) . The Structure of Moslem Society in Inner Mongolia The Far - Eastern Quarterly, V. 8 no. 1, 1954

1. 1948

中国回教社会の構造(社会構成史大系、第一部、1949、第二部、1950)

(24) 甘肅回民の二類型(民族学研究所紀要、1、1944)

(25) 佐口 透、中国ムスリムの宗教的生活秩序(民族学研究、8の4、1953)

(26) 中国イスラムの經典(東洋学報、32の4、1950)

(27) 伊東忠太、広東に於ける回教建築(建築雑誌、363~370、1917、東洋建築の研究、

所収)

(28) 村田治郎、回教の寺々(東亜学、1、1939)

花頭曲線の文化(学海、1の1、1944)

中国回教寺院の二つの型(日本建築学会研究報告、12、1951)

(29) 田坂興道、西洋暦法の東漸と回回暦法の運命(東洋学報、31の2、1944)

(30) Yabuuchi Ko, Indian and Arabian Astronomy in China
(Silver Jubilee volume of the Jimbun Kagaku Kenkyū-
jo, 1954)

(31) 角野達堂、清真大学考(回教図、5の4、5、1942)

回儒劉智の「天方典禮要解」(支那仏教史学、4の1、1941)

Mawālī に 就 い て

I

中 村 満 次 郎

最近筆者は、前期アッバース朝社会に於けるMawālī (単数Mawla) に就いて付言した二つの論文を書見する機会を得た。一つは、東北大学文学部年報第七号所載 佐藤圭四郎著、アッバース朝社会の一考察であり、今一つは、アハマド・アミーン著「イスラムの朝」第一章第二節、ArabとMawālīとの抗争である。Mawālīに就いては、殊にArabとの関係に於いて、アッバース朝社会の特質を遺憾なく表示しているため、佐藤氏は、Mawālīに就いてはとも角、同論文を未だ完結しておられない時に、その論文に就いて書くことは素より憂慮されるが、ここに一筆して同氏の叱責を賜われれば幸甚の至である。

アハマド・アミーン氏は1887年エジプトのカイロで生れたイスラム学者であつて、その著書「イスラムの朝」は「イスラムの黎明」の続編として1933年カイロで出版された、前期アッバース朝時代の社会、思想、文化、宗教の各方面に亘る研究書である。時代的には佐藤氏が対象とされた「アッバース朝の最盛期、就中アル・マフディーよりアッ・ラシードに至る時代」に相応